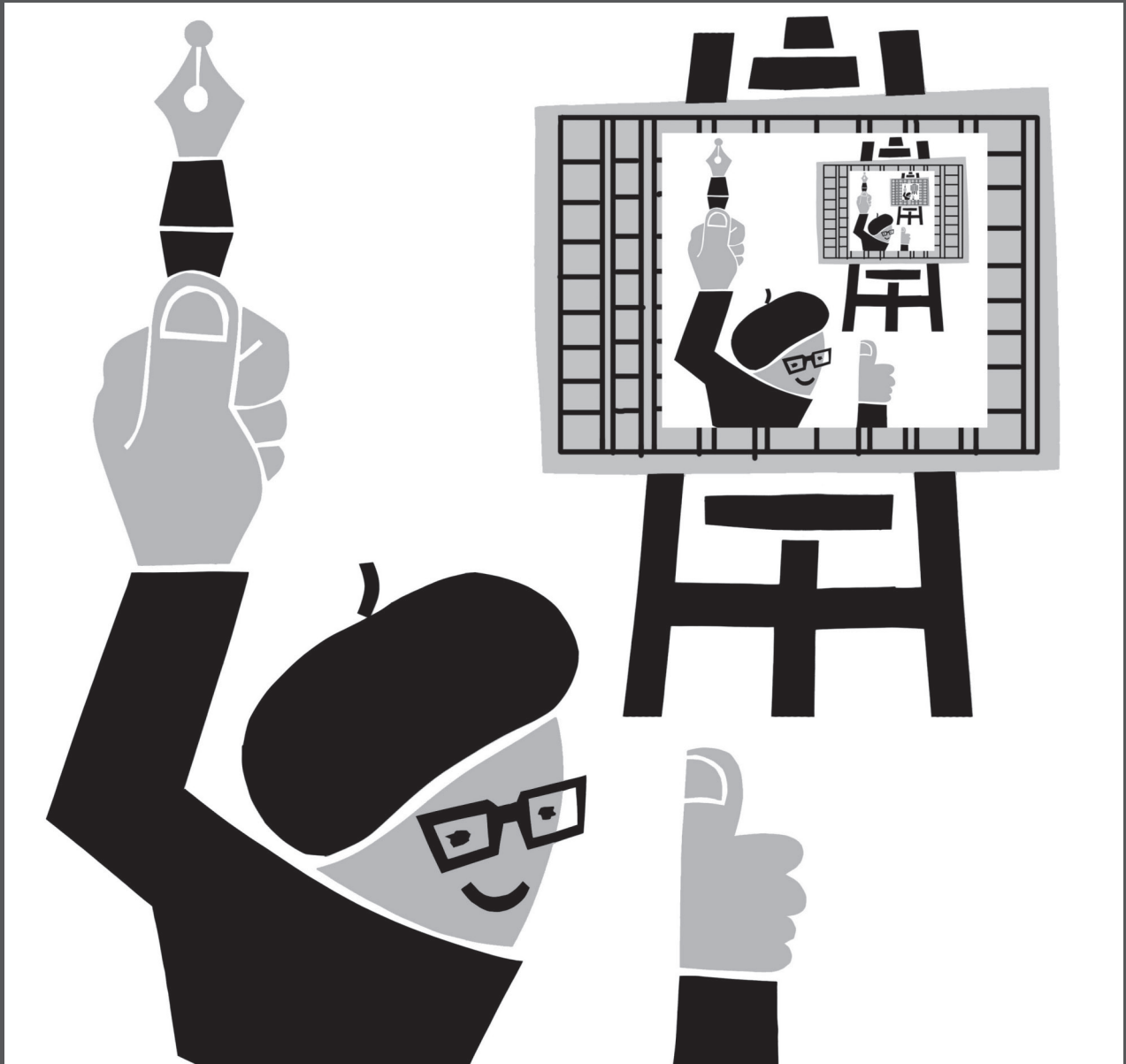


題材でもなく筋でもなく

小説は描写が決め手！



「小説は描写で書くもの」と言います。

では、描写って何？ 説明文と描写文はどこが違うの？

情景描写とか心理描写といった区別もあるけど、違いはあるの？

初心の方ならそう思うでしょうし、小説に通じた方でも、
いざ描写文を書けと言われると、はたと手が止まってしまう人もいます。

そこで今回は「描写文」を特集し、小説を書く参考にしてもらいます。

薄井ゆうじ先生インタビュー

小説は、流動している一瞬を 捕らえようとする行為

描写以前の問題

——テーブルの上にコーヒークップがあったとして、コーヒークップの香りやカップの色など細部を書けば描写になる？

描写とは何かを説明する前に、今の例で言いますと、どうしてコーヒークップがそこにあると書きたくなったのか、なぜ描写するのかという問題があります。

——描写する必要があったとして、どんな言葉を選ばいいでしょうか。

どこから引っぱってきた珍しい言葉を使っても、そこだけ目立ってしまいます。まずは誰にでも分かるように書いてみる。平易に書くのが一番です。「テーブルの上にコーヒークップがあった」と書けば済むところを、変にこねくり回して難解にしても、それは絵画で言うところのデッサンが崩れた代物であって、コーヒークップの描写の箇所だけ重量感が出てしまうんです。

——そして重要でない箇所の描写を厚くしても意味がないですね。こうした描写以前のことで、ほかに注意しなければいけないことはありませんか。

たとえば「僕が飼っているペットは柴犬だ」と書いたのを、ページをまたいでまた書いてしまうこと。読者は一度読んだら覚えていくものです。再びペットを登場させたいなら、別の情報を入れなければいけませんね。

もし「僕が飼っているペットは柴犬だ」ということが読者に伝わっているか心配なら、最初にペットが登場したときに、少し長めに説明を書いておく。そうすれば印象に残りますから、同じことを二度書かなくて済みます。

頭の中に映像を浮かべる

——薄井先生は、小説を書く前にノートに情報をまとめますか。

メモを取ることはありません。私は、「山小屋のドアを開けて中へ入った」と書いたときには、すでにその映像が頭にあるんですよ。山小屋へ続く道の様子や、ドアをどっちの手で引いたのか押したのか、暖炉の位置からベッドのシーツの柄と色、床の板の目まで見えています。見えないうちは一行も書けません。



薄井ゆうじ（うすい・ゆうじ）

1949年、茨城県生まれ。イラストレーター、デザイン編集会社経営を経て、1988年に『残像少年』で第51回小説現代新人賞を受賞し作家デビュー。1994年、『樹の上の草魚』で第15回吉川英治文学新人賞受賞。本誌の作品添削講座で小説講座の講師を務めている。

どうすればいいでしょうか。

頭の中で映像を再生するのは、訓練次第でうまくいくんですよ。メモは、メモ自体を書き漏らしてしまう可能性もありますし、頭の中に映像として記憶してしまったほうが、効率がいいのではないのでしょうか。

「分からない」を前提に書く

——これまでは主に情景描写に関するものでした。性格描写や心理描写についてはいかがですか。

登場人物が悲しい出来事に遭っても、「悲しい」と書かないのが小説なんです。この「悲しい」という感情が、表現したい

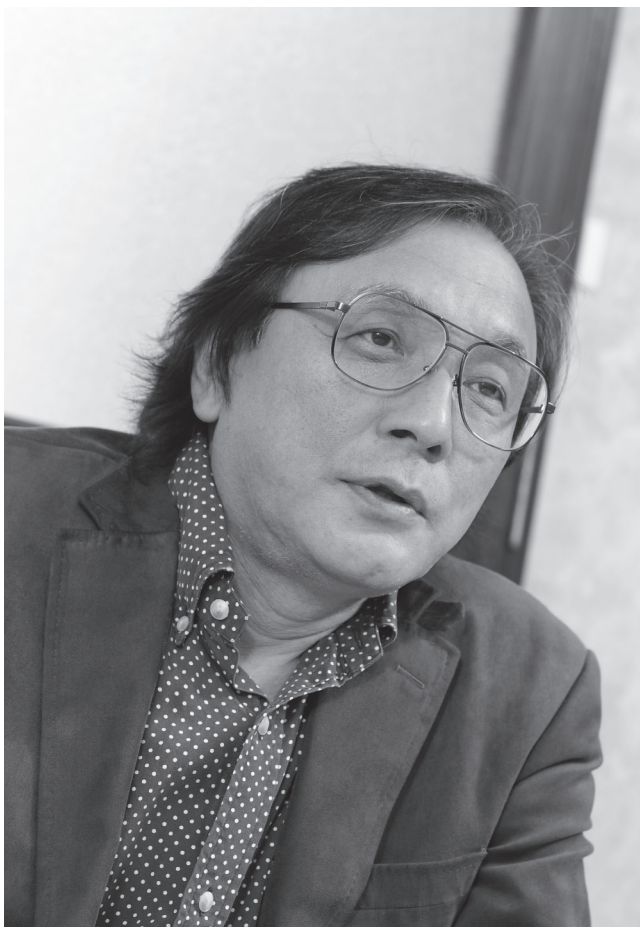
ですから、「右手でドアを引いた」と書いて何十ページあともなっても、「左手でドアを押した」と間違ふことは決してないんです。

——頭の中に絵がある強みですね。書く際は、その絵を言葉にしていける？

そうですね、先ほどのコーヒークップの例でいうと、いきなりカップの描写から始めてしまうと、全体の位置関係が分かりませんよね。

私だったらもつとカメラを引いて、部屋の中に何と何が置いてあって、という全体を見渡す視点で書き始め、その後、カップへと焦点を合わせます。

——「ワイドからクロース（近づく）」ですね。ところで、映像が頭にならない人は



中心だとしましょう。

このとき、書くのは中心ではなく、その周りになります。将棋で駒を詰めるように周りから攻めていきます。

——周りを書くことで、書かなかった部分をくり抜くイメージですね。

そう、「僕は君が好きだ」、あるいは「私はあなたに出会えてうれしい」といった感情は、ストレートには書かない。書けないといってもいいです。

一人称だったら、主人公の心の中は自由に書いていいと思うかもしれませんが、そうではありません。一人称だからこそ、人の心をいじってはいけません。

——心をいじる？

心の中のことは、誰にも分かりません。自分の本当の気持ちだつて分かりません。分からないからこそ自分探しを題材にした小説が世に溢れているわけで、それなのに分かったつもりになって「僕は悲しい」なんて言い切ってしまうのは浅はかいです。

他人のことについても同じ。「山田は悪人」とか「伊藤は優しい男」とか書いてしまう。本当にそうだろうか？ もしかしたら違うんじゃないだろうか？ 立ち止まって考える必要があるんですね。

実は山田がやむにやまれぬ事情で悪に

走ったという事実が一つの歯車を回し、それが伊藤の見せかけでしかなかった優しさというもう一つの歯車と噛み合うことで動力を得る。小さな歯車がやがて大きな歯車を回していくような構造が、性格描写や心理描写には欠かせないと思うのです。

心は捕らえた瞬間に逃げていく

——情景描写は全体をイメージして、見えるものを書く。性格描写と心理描写は分からないものを探りて書く？

後者について少し補足しますと、性格はこうだと断言できない部分が絶対にある。一方の歯車が回っているときに別の歯車が違う動きをすることが往々にしてあるんですね。

——本来は気のいいAという男がいて、誰かの言動によってAの嫌な面が出てしまつたか？

そういう流動的なところがあります。これは心理についても同じです。誰かに「バカだ」と言われたとして、思わずカッとなる場合もあるでしょうし、褒め言葉だと理解してうれしくなる場合もあるでしょう。

——人間を描くのは一筋縄ではいかなそうですね。

人はみんな違いますし、個々を見ても少しずつ揺れながら変化しています。そ

の認識がなければ、小説を成り立たせることは難しいでしょうね。同じサイズの歯車が一箇所に集まっているようでは、大きな力を生み出せません。

——心理描写を書くこうとして、話を見失う人もいます。

何を基準にして書けばいいかという座標がなくなってしまうことはあります。では、どうするか。そこで情景描写の出番なんです。

登場人物がどんなに泣き叫ぼうが何しようが、情景描写を入れることによってふつと我に返ることができる。「山小屋の外で鳥が鳴いた」と書けば、ここが話の軸だったんだと作者も読者も気づいて、話に立ち戻れるんです。

——人間とか心とか、つかみどころがないですね。

小説を書くことは、流動しているある一瞬をばつと捕らえようとする行為であつて、けれどもとらまえた気になつていると逃げていくものなんです。逃げていくからこそ次の行を書ける。

ところが、そこでうまくとらまえてしまったら読者は面白くないし、書き手も次に何を書けばいいのかわからなくなつてしまう。手から滑り落ちたものを追いかめるのが小説とも言えるでしょうね。

——複雑で掴みどころのない人間を描く手段として描写がある、ということでしょうか。本日はありがとうございました。

小説は描写が決め手！ 情景描写部門

『落とし物』 網島 修

スキー場では太陽が沈むのが早い。雄介は妻と息子と一緒に遅めの昼食を済ませ、コーヒーをゆっくり味わって、ゲレンデに戻った。冬の日も釣瓶落としのように短い。もう太陽が山に入りかけていた。

雄介は、数年ぶりに、正月休みを利用して家族とのスキー旅行を楽しんでいた。ゲレンデは人の姿も疎らだ。初心者の若いスノーボーダーが行く手を邪魔することもあるが、珠にリフト待ちの時間は短く、思う存分に滑ることができた。

「お父さん、待ってよ」

すぐ近くから男の子の声が聞こえた。昼食後、トイレに妻と一緒に待って遅れてきた七歳になったばかりの息子だった。彼はリフト待ちをしている雄介の右手の山側のほんの数メートル先から、スキー板の後端を開いてV字形にして速度を落とし、ゆっくり回転しながら滑り降りて来ていた。スキー学校で習ったばかりのボーゲンだったが、飲み込みが早いらしく様になっていた。

「ゆっくり来なさい」

雄介が声をかけた途端に、息子はそのまま後ろに転んでしまった。

「大丈夫か？」

雄介がストックを放り投げ、スキー板から素早く足を外して駆け寄ると、息子はすぐに起き上がり尻に付いた雪を払い始めた。

「勇敢、大丈夫なの？」

息子の後から滑っていた母親がスキーに乗ったままで雄介のすぐ隣に来た。

「もう、疲れちゃったから、やめようよ」
「そうだな。少し暗くなってきたし……。そろそろホテルに帰ろうか」

三人は、駐車場に向かって歩き始めた。
「そう言えば、スキー場の上の方で、こんな物を拾ったよ」

勇敢はそういうと、スキーウェアのポケットから透明な電車の切符のような物を取り出した。何の文字も絵も描かれていなかった。ガラスの板のようだったが、どちらかというと、アクリル板のように見えた。

「また、そんなゴミを拾ってきたな」

雄介が微笑んだ時である。

「あ、あれ！」

右上方の山の斜面を息子は指差した。大きな火の玉が走り、ドーン、という低い轟音が鳴り響いた。火の玉は山の斜面に吸い込まれるようにめりこんでいった。隕石だろうか？

雄介が一瞬のうちに思っていると、雪崩が起き白い波となり、襲いかかってきたのだ。必死に逃げようとした。人々を大量の雪が飲み込みはじめた。もう逃げ切れないと観念すると、雄介は息子と妻をしっかりと胸に抱き、そのまま二人に覆いかぶさって家族を守るようにうつ伏せになった。雪は三人の上に容赦なく積み重なって行った。

雪崩が収まったところ、どこからかジェット戦闘機が現れた。それは、垂直離着陸機（VTOL機）のようで、ヘリコプターのように空中に停止した後、地上すれすれのところで

停止した。扉が開き、ゆっくりと三人の乗員が降りてきた。

その中の一人が、七インチほどの長さの透明なガラス板を、雪崩で埋まったゲレンデに向けていた。タブレット型をした何らかの探知装置なのだろうか。四方の雪の山、一箇所から反応があったらしく、三人はある地点に移動した。

探知装置を持たない残りの二人が、登山に使うような杖を二本ずつ手に持ち、雪の上に刺した。もう一人が再び探知装置を操作すると、その杖に囲まれた長方形の空間の雪が消え、気を失った雄介たちの家族が現れた。一瞬、怪訝そうな顔をした救助者だったが、気を失っている子どもとスキーウェアのポケットからアクリル板を回収した。

再び、雪崩の中を搜索し始めた。すると、すぐに一人の探知装置に反応があった。杖を持った二人が彼のもとに集まってきた。探知場所を確認すると、二人は杖を使って雪を長方形に消した。今度は間違はなく、彼らの仲間だった。彼は気を失っていたが、救援処置をされると意識を取り戻した。

やがて、四人は垂直離着陸機に乗り、どこかへ消えた。もう一機の垂直離着陸機のような飛行物体が現れ、山の斜面に半分ほどめり込んだ物体を目に見えない力で吸引して持ち上げると、そのままどこかへ運んで行った。救助者が去った数分後、雄介たちは意識を取り戻した。ゲレンデは雪ですっぽりと埋まり、彼らの他に生存者はいないようだった。

情景描写部門

『落とし物』評

薄井 ゆうじ

【細かなアドバイス】

① これは漢字ではなく「へたまに」と、ひらがなで書いてください。ワープロが勝手に漢字に変換してしまうのを、こまめにひらがなに戻していかないと、漢字だらけの文章になってしまいます。

② 「思う存分」の「へに」の送り仮名は不要です。そしてこの文章は「へたまに」ではじまっているので、「思う存分、滑ることができることもある」としたほうが自然です。

③ この「途端」の送り仮名「へに」も不要です。

④ これは「一瞬、そう思ったとき」のほうが読みやすいです。

⑤ この「へのだ」は、不要だと思います。

【情景描写の全体的なアドバイス】

情景描写の難しさは、書き手が思い描

いているような情景が、読者にも伝わるかどうかです。まだ伝わっていないのに、書き手だけがわかっていて先に進んでいけば、読者は取り残されます。逆に、くどくどと情景を細かく書きすぎれば読者は飽き飽きします。どの程度に書けば的確なのかは、多くの小説を読むことと、何度も書いてみて、その情景が正確に伝わっているかどうかを誰かに訊いてみることだと思います。

この作品はスキー場のシーンで始まりますが、前半の、ほのぼのとした家族の様子はある程度読者に伝わるとは思います。しかし、Aから突然、様相が一変します。この変化が急激すぎて、読者は混乱します。もしこのように急激な変化を書くな、火の玉が落下する様子や、巨大な音、そしてゲレンデの人びとの逃げ惑ったり驚いたりする様子をもっと書き込んで、読者もゲレンデの混乱に引き込まないといけません。そのためにはAの手前の部分をもっと手短かに書いて、何かが落下する様子をあと10行くらいは増やしたほうがいいです。

そしてBですが、ここまでは雄介の視点で書いてきたのに、主人公たちが雪に埋まってしまったからのB以降は、誰の視点なのでしょう。いわゆる神の視点になっているのですが、視点が変わったことがわかりにくくなっています。視点は、情景を映し出すカメラです。カメラ

が変わったことを読者にどう伝えるかですね。

やはりこれは、危機一髪でどこかに逃げた雄介が、雪の下に埋まった妻と息子を心配しながら見守っているというふうな、視点を雄介から移動させないほうがいいと思います。そのほうが、読者もはらはらしますし。

その神の視点ですが、CとDは、どうして「探知機」や「救助者」だとわかったのでしょうか。雄介の視点であれば、へのようなものという書き方でも伝わるのですが。

そしてEですが、ここで「ある地点」と、投げやりな描写をしてはいけません。ここはリアリティを出すための、最大の重要な箇所だと思います。せめて「ゲレンデの最上部、リフト・タワーの足元近くに、雪が巨大な白熊のように大きく盛り上がり上がっている地点」などと、さっと描写してあれば、現実感も出てくると思います。

情景描写は、ややもすると書き手にとっては退屈な作業だと思われるがちです。

しかし物語の舞台装置をしっかりとつくって、読者にもその映像が見えるように書かなければ、舞台上での出来事が、すべて絵空事になってしまいます。そして書き手が楽しみながら情景描写を豊かに書かなければ、読者も退屈してしまいます。

読者が楽しめるような情景描写——それを書くためにはまず、書き手自身が、その物語の舞台にあるものすべてを、頭のなかに、くつきりと描けているかどうかだと思います。その映像を文字で写し取るようにしてリアルに描くことで、読者を舞台に引きずりあげなければなりません。

そういう大切な作業であることを念頭に置いて、無駄なことは書かず、必要な情報はすべて書き込むようにしなければ、小説という精密機械は作動しません。



北海道 網島 修さん
(57歳・非常勤講師)

薄井先生から講評していただいて、改めて自分の未熟さを痛感しました。特に、視点が途中から変わったことは、先生に指摘されるまで、気が付きませんでした。

小説は物語の舞台装置をうまく作って、読者にもその映像が見えるようにし、書き手も楽しみながら書くのが重要だということも納得できました。

これからもうと小説をたくさん読んで、舞台装置がうまく書けるようになりたいと思いました。

小説は描写が決め手! 性格描写部門

『恐れない受験生』 中村美紀

時間は既に夜の十時を過ぎていた。ここ数日は、寝る間を惜しんで勉強する日々が続いていたのだが、さすがに今日は体力を温存させる意味で早く寝た方がよさそうだった。参考書をバッグに詰め込む。いよいよ明日が入試か。緊張から拳を握りしめる。ふと、手のひらに当たるとがった感触が気になった。手を開いて指を見ると一目了然だった。爪が伸びている。最近勉強に集中していたからすっかり忘れていたなあ、と爪切りを引き出しから取り出した。刃を爪に当てると、「夜に爪を切ると親の死に目にあえない」という母の言葉が思い出された。しかしそんな言葉も次の瞬間には爪が弾ける音とともにかき消されていた。そんな迷信に過ぎない。私はそんなの信じない。

入試当日、私は同じ中学校の友だちと一緒に参考書を開きあつて確認をしていた。床に置かれている友人の鞆が目に付いた。よく見ると、他の同級生の鞆にも同じものが付いている。私はそれが何なのか友人に尋ねた。すると相手は驚いた。なんでも、お菓子のおまけである合格祈願ストラップらしい。言われて思い出した。受験生応援グッズという名で商品名やパッケージを工夫したお菓子が沢山売られているではないか。私もそんなお菓子を買った覚えがある。確か、パッケージに「合格祈願絵馬」が付いていて、志望校を書く欄があった。でも、そんなものはとうに捨てていた。私にとっては、よく買うお菓子のパッケージがたまたまいつもと違っていただけだ。

入試なんて結局は自分の実力なのだからと大して気にも留めていなかった。

試験を終え、私は雪の降る通りを歩いていた。落ちた気はしない。もともと、倍率から考えても落ちる人はほとんどいないはずだし、手ごたえから考えても落ちるグループに入ることは無いだろう。口では「どうなるか分からない」などと友人に言っておきながら実際はそれほど危機感を感じていなかった。風が次第に強まっていき、所々が凍った地面と相まって周りを歩く制服姿の人々はそれにおびえているように見えた。私には分かる。みんなこの道で転ぶのが怖いのだ。受験において「すべる」「転ぶ」は禁句なのだから。しかし私は恐れることなく足を前へ勤めていった。もう答案の中身を変えることは出来ない。もう転んだって関係無い。転ばなくなつて落ちる時は落ちる。わざとらしいレベルでそろそろと歩いていた人が転んでこの世の終わりかと言わんばかりの声で慌てていたのが滑稽に写った。寒いので近くの自動販売機で温かいお茶を買う事にした。百五十円を入れてボタンを押すと、熱いペットボトルと二十円のお釣りが返ってきた。つまり百三十円のお茶か。「130」は「13」を連想させるからこれでも縁起が悪いと感じる人もいるのだろうと考えながらお茶を流し込んだ。

合格発表日。家を出ようすると母がやってきて「合格を祈って仏壇にお祈りしなさい」と言う。私はめんどくさいとそれを一蹴してゆつくりとした足取りで玄関を後にした。

友人と待ち合わせて発表会場である高校へと向かう。

「こっちは道は通りたくないな」
こんなことを言うのは珍しいので理由を聞いた。

「最近黒猫が通るんだよ」

そんな理由でわざわざ遠い道を選ぶというのは私には考えられなかったが、小学校の時から友人だ、特に反論しようとは思わなかった。くだらない口論で友人を失うのは嫌だという感情くらいはある。

会場に着くと、番号を貼りだすボードの前は既に人でごった返していた。友人は前へ前へと行こうとしたが、別に急いで見るほどのものでもないと思い集団の最後部で大人しく待つことにした。場の緊張が私の中に伝わってくる。遠くには中学校の先生が何人かいるのが見えた。不安そうな声が絶え間なく聞こえる。そして発表の時間が近づいてきた。

模造紙を二人がかりで運んでくる先生と思われる人物が見えた。誰かが大声を張り上げてそれを指差したと同時に、ざわめきが一瞬消えた。私もそれを見つめる。さすがに少し緊張する。その時私は気付いた。私を除く全ての生徒が手を合わせ始めていたことに。まるで紙を持つ先生が神様であるかのように見えた。合格を祈る生徒という名の信徒。しかし私はその中に入ろうとは思わなかった。寒さに震える手をただ重力に任せて下に下ろしたまま、「神様」ではない「先生」を見つめていた。

性格描写部門

『恐れない受験生』評

薄井 ゆうじ

【細かなアドバイス】

① これは漢字ではなく「へすでに」と、ひらがなで書いてください。ほかにもひらがなのほうがいいと思うものがいくつかありました。

② 熟語は漢字とひらがなを使用する「交ぜ書き」はしないで、「友達」と書いてください。

③ すると相手は驚いた——その理由がどこにも書かれていないので、この文章だけが宙に浮いています。「こんなものも知らないの」という意味だとは思いますが、端折ってはいけません。

④ これは「進めて」ですね。

⑤ 「わざとらしいレベル」とは、何なのでしよう。わざとらしく、ということを書きたかったのだと思いますが、意味不明ですので、この部分は不要だと思います。

⑥ これは「映った」のほうが的確ですね。

【性格描写の全体的なアドバイス】

面白い話を考えつきましたね。他愛のない迷信を、これだけ並列的にならべても、さほど飽きずに読むことができました。

ただし性格描写という観点から言えば、この作品は本当に主人公の性格を深くえぐりながら書ききっているのだからか、と思いました。「夜、爪を切る」「合格応援グッズに頼る」「へすべる、転ぶことを嫌う」「13という数字を避ける」「仏壇に祈る」「黒猫を避ける」などなど。よく集めたとは思いますが、せっかくこれを書いたのなら、もっと人間の心のなかに深く切り込んでよかったのではないのでしょうか。

つまり、「迷信にこだわっているのは、実は主人公だった」のではないのでしょうか。友達は実は、そんなことなどにかまわず、自然に振舞っているだけなのに、主人公だけが一人で気にしていた——そういう結末にしてもよかったと思います。それと、これはとても大事なことなのですが、**A**で「へ私」という一人称が出てきます。そしてこれ以降の文章から読者は最後まで、この主人公が男性なのか女性なのかの情報を得ていません。友人たちの話し言葉から性別を類推しようにも、最近の若い人の話しかたは、文字にする

書き手は、わかっているのに、読者には伝わっていないという典型的な見本ですね。

ほんの少しでも、「制服のスカートにアイロンをかけながら」とか「坊主頭を撫でながら」などと書いてあれば、男女の区別がつくのですが。

それと主人公の年齢なのですが、**②**のあたりに「同じ中学の友達」とあるので高校入試かなと思うのですが、もしかしたら中学時代からの友人で、大学入試かもしれないという不安が残ります。いづれにしても**②**の表現がなければ、高校か大学入試なのかの手がかりはなく、まったくわからなかったのではないかと思います。

性格描写についての指摘に戻りますが、やはりその人物の性別や、およその年齢がはっきりしないと、書かれている事実からどのように性格を読み取ればいいのかの座標を失うことになります。書き手はわかっているのに、当然のように「高校入試の女性」だとして書いているのかもしれません。読者は置き去りにされています。そのために、「夜の爪切り」「お守り」「13」「黒猫」「仏壇」などに対して主人公は、どの程度反応するのが普通なのか、どの程度からは異常な性格なのか、手がかりがつかみきれなくなっています。

やはり私（薄井）ならここは、主人公

を大学受験生の男性にして、へいい年をした男の子が、迷信なんてと馬鹿にしながら、実は本人がいちばん迷信にこだわっていた」という結末にしたいと思います。

そして受験発表の結果が書かれていますが、私ならはつきりと、「合格者の名前に、私の名前はなかった」と書いてと思います。



秋田県 中村美紀さん
(23歳・大学生)

数年前から趣味で小説を書き始めました。現在は新人賞への応募を目標に作品を書き進めているところです。今までは誰かに作品を批評してもらった経験がなく、自分の文章が物足りないと思う思っている、具体的な改善点

が分かりませんでした。今回の作品は高校入試を受ける女性を書いたつもりでしたが、設定が読み手に伝わっていないことが実感できました。今後はアドバイスを参考に読み手の気持ちを考えた文章作りを心がけて、様々な新人賞に挑戦していきたいです。

小説は描写が決め手！ 心理描写部門

『前門の虎、後門の狼』 藤原 崇

①公男は、カフェの椅子に座って文庫を読んでいた。日曜とはいえ午前中とあって、店內には客はまばらだった。

②萌香も来ない。毎週日曜、ここで落ち合っているのに、今日は遅いなあ。そう思ったとき、窓の外に小柄な女性が現れた。胸元で小さく手を振っている。萌香だ。

彼女は公男からは死角になる横手の入り口のほうに歩いていった。

直後に、入り口のドアが開く音がし、公男のほうに歩いてくるヒールの音がした。公男は振り向きさま、遅かったね、と言いかけて言葉飲んだ。

「麻由美！」

そこにいたのは妻だった。突然のことになんと言っているか戸惑っていると、間の悪いことに続けて萌香が店に入ってきた。公男に笑顔を向けたが、しかし、それはすぐに、お取り込み中？という顔に変わった。

萌香は顔中を疑問符にしたまま入り口近くの席に座り、水を持ってきたウェイトレスにカプチーノを注文した。

麻由美は公男の隣の席に座り、萌香の注文を聞き終えたウェイトレスに「ルイボスティー」と告げた。

③「あのね、本を読むためのカフェが近所に来たって聞いて、あなたにぴったりだと思って下調べに来たのよ。そしたら本人がいるんで、もうびっくりよ」

麻由美は目を見開いて見せたが、すぐに肩を落とした。「でも、知ってたのね」

公男は曖昧にうなずき、「日曜ぐらいしか、ゆっくり本も読めませんから」と丁寧な言葉で言った。もちろん、萌香に、あの人は近所の知り合いだと言いわけするためだ。

「私が酷使してるって？」

敬語で答えたのを皮肉と思ったのか、麻由美は頬を膨らませた。酷使だなんて。この一言で、近所の知り合いで通すことは難しくなった。さて、どうしたものか。

「そんなことはありませんよ、お姉さん」

今度は、あの人は実家の姉、で通すことにした。妻のことをお姉さんと呼んだことはなかったが、麻由美は三つ年上だから、そう言ってもおかしくはない。

しかし、麻由美はこれも皮肉ととったようで、「また年寄り扱いして」と突っかかってきた。

「まあまあ」なだめるように言い、「今日はテニスはいいんですか」と水を向けた。

「そうだ、忘れてた」

麻由美は弾かれたように立ち上がった。心の中でガッツポーズをする。麻由美の向こうでは、萌香が不穏な空気をかもしながらこちらをちらちらと見ているが、その視線からもうすぐ解放されるだろう。

と、そこにウェイトレスがルイボスティーを持ってきた。まったく間が悪い。

「まだ飲んでなかったわね」

腰を浮かせかけた麻由美はまた椅子に座り直し、お茶に口をつけた。ふりだしに戻ったかと思ひながら萌香を見ると、眉間に皺を寄

せていた。誰なのよ、その女、とても言うかのように。

「お急ぎなら、そのお茶、引き取るけど」

公男の言葉に、麻由美はお茶をすすりながら横目で睨んだ。

「なによ、おじゃま？」

「そういうわけじゃないけど、ゆっくり読みたいと思ってね、これ」

「これ」を示そうと文庫本を持ちあげたら、コーヒーカーップの端に当たり、こぼれたコーヒで袖を汚してしまった。

「何やってんのよ」

麻由美はテーブルの紙ナプキンに手を伸ばしたが、かいがいしく世話をされてはかかない。「どうぞ、おかまいなく」と他人行儀に答えたが、それが藪蛇になった。

「かまうわよ、クリーニンング代だってバカにならないんだから」

家計を同じくする者でなければ、クリーニンング代など心配しない。これはなんと言いわけたものだろうか。

「分かった。トイレで洗ってくる」

席を立ち、トイレに入った。袖は洗い終わったが、妙案は思いつかなかった。どうしたものかと席に戻ると、萌香と麻由美がなぜか談笑していた。

「なんで？」

公男の気配に気づいたのか、二人が同時に笑顔で振り返り、声を揃えて言った。

「お帰り。さあ、ここに座って」

心理描写部門

『前門の虎、後門の狼』評

薄井 ゆうじ

【細かなアドバイス】

① 〈公男〉〈萌香〉のような人名や地名などの固有名詞は、いろいろな読み方があるので、ルビ（ふりがな）を振ってくださう。

② これは〈文庫本〉と、ていねいに書いてください。あとのほうではちゃんと〈文庫本〉になっているのですが。

③ すこし変な文章です。〈店内は客がまばらだった〉または〈店内にいる客は、まばらだった〉のように。

④ 〈？〉や〈ー〉の直後は、一文字ぶんの空白を作ってください。

【心理描写の全体的なアドバイス】

面白いですね。特に主人公が二人の女性を前にして、丁寧語を使ったり、お姉さんと呼んだり、たたみかけるように行動を起こすのですが、それらがすべてうまくいかずに、少しずつボロが出てくる

あたりが愉快でした。

特に感心したのは、へバレそうになって困ったとか〈問い詰められてどきどきした〉などと、心のなかをナマな言葉で書いていないところです。心理描写というとき、いきおい〈腹が立った〉〈悲しい〉〈悔しかった〉などと書いてしまうとこゝろですが、実は、そういうナマな言葉を使用しないで心理を書くからこそ、そこに小説的な醍醐味が生まれ、読者に小説を読む楽しさを提供できるのです。つまり、行間を読ませるわけです。

この作者は、そのあたりの微妙なバランスを知っているのか、㉠のあたりでも主人公の、あるいは妻や不倫相手の女性の心のなかが自在に読み取れるように、それを行動や言動だけで書いています。

この作品が成功しているもう一つの理由は、一人称的な三人称で書かれており、〈公男〉の視点からの描写だからこそだと思えます。これをもし〈僕は〉という完全な一人称で書いたなら、心のなかが書きやすくなって、つい〈困った〉とか〈泣きそうになった〉などと書いてしまうところですね。三人称は、心のなかと適度な距離を保ちながら書けるので、押しつけがましくない心理描写ができる手法だと思えます。反面、一人称は、心のなかをくどくどと書くのには向いているのですが、どんなに詳細に書いたとしても心のなかというものは、書ききれないも

のだと思えます。なぜなら一人称である〈僕は〉は、いちばん自分自身のことばかりに、くいつ存在だからです。だからこそ自分自身を知ろうとする〈自分探しの小説〉の場合、一人称で書くことが多くなるのだと思えます。

それなので、主人公の心理が書きやすいからという理由だけで一人称を選ぶと、主人公の本当の心はどこにあるのかという部分が書きにくくなります。つまり、〈僕は本当はくなのだ〉と書けば書くほど、その言葉が嘘くさくなります。三人称であれば、〈山田は本当はくなのだ〉と書けば、それが確定した事実になるという利点があります。

さて、作品に戻ります。ひとつ疑問に思ったのは㉡では毎週来ているのに、㉢では最近できた店と言っています。整合性がとれていないと思いました。そして、この作品の、いちばんわかりにくい部分は、㉣のラストシーンだと思えます。女性二人はなぜ笑顔で公男を迎えているのか。たぶん、これから主人公を二人でこらしめてやろうという雰囲気なのかと類推することはできますが、それを読者に丸投げしないで、ていねいに、きちんと書くべきでした。そうしないと、この作品が何に向かって、どんな読後感を用意して書かれたのかも読み取りにくくなります。この作品の終わりがたは、いろいろ考えられますが、ひとつだけ例を書

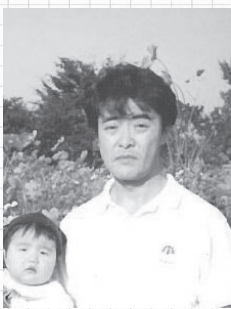
いておきます。

〈笑顔でそう言った二人に、公男は不思議そうな顔で言った。

「どちらさまでしょうか？」

かるい笑いを取ることもできるし、もっとシリアスなラストも考えられます。

「さあ、ここに座って」というラストでもいいとは思いますが、もうすこしのあと三十秒間くらいのシーンをきちゃんと書いてもよかつたかなと思いました。読者は食欲ですので、たしかに決着を求めるのではないのでしょうか。



岡山県 藤原 崇さん
(47歳・会社員)

書くのは二十年ぶりぐらいです。大学のときの先生は、毎週おかしな課題ばかり出しました。石ころを拾ってきて、それについて十枚書けとか。内面を書かずに内面を表現しろとか。当時は意味が分からず、課題も出さず、麻雀ばかりしていました。今になって分かりました。あれば、描写のトレーニングだったと。

これからは少しずつ書いていきたいと思えます。

描写が書けなければ 小説にはならない

§1 描写とは？

【描写は筆づかいや配色】

描写とは何かというと、辞書では「物の形や状態、心を感じたことなどを言葉によって写しあらわすこと」とか、「いきいきと写す」「ありありと書く」のように書かれていると思います。確かにそのとおりですが、これではなんだか漠然としていますね。

描写とは、絵画における筆づかいや配色に相当します。

（島田雅彦『小説作法ABC』）

絵であれば素描と言えいいでしょうが、輪郭を描いたりしたものが説明で、色合いだとか筆づかいだとかが描写になります。

では、なぜ描写をするのでしょうか。

僕の生家は、山の手の邸宅街の中でも

とりわけ目をひいた。

たとえば隣り合わせの原っぱで野球をする子供らは、貴重なボールが築地塀を越えて邸に飛びこんでしまったら最後、頼みこむことも忍び入ることもできなかった。そこで近所に友人のいなかだった僕は、歓声が聴こえ始めるとグローブをはめて庭に出、ボールが飛びこんでくるのをいつまでも待ったものだった。本当は一緒に野球をやりたいだけだったけれど、それは堅く戒められていたので、姿の見えぬもう一人の外野手になってファウル・ボールを投げ返すばかりはなかったのだ。

（浅田次郎「悪魔」）

描写というより回想のようですが、ただ、全体を通じて匂ってくるものはあります。では、これを要約するようになかちで、「子どもの頃、僕は邸宅に住んでいた。孤独な少年だった」とだけ書いてはどうでしょうか。

いい小説の要件というと、着想、ストーリー、構成といったことがあがると思えます。でも、描写でない文章、たとえば、あらすじのような文章だったら、どれだけ設定が斬新で、どれだけストーリーが巧みだったとしても、いい小説とは言えませんし、それ以前に、それでは小説になりません。ということ、ここでは描写についてまとめてみます。

話の主旨は伝わりますが、いわく言葉にしたい情感なり雰囲気なりはすべて取りこぼされてしまっています。

それに、そんなに単純に「孤独」と言っているのか、孤独には違いなければ、ちよつと違う色合いもあったんじゃないか、という気もします。

つまり、説明しただけでは伝わらない、一言では言えない、だから、描写で伝えるわけです。

【写生文という基本】

しかし、言葉には多義性がありますから、説明しただけでは伝わりにくいもの、たとえば、感じやニュアンスを伝えようとして過剰に形容詞や比喩を重ねていくと、かえって意味が遠ざかっていつたりします。では、どうするか。正岡子規はこう記しています。

或る景色又は人事を見て面白しと思ひし時に、そを文章に直して読者をして己と同様に面白く感ぜしめんとするに、言葉を飾るべからず、誇張を加ふべからず只あり

のまゝ見たるまゝに其事物を模写するを可とす。（中略）

写生といひ写真といふは實際有のまゝに写すに相違なけれども固より多少の取捨選択を要す。取捨選択とは面白い処を取りてつまらぬ処を捨つる事にして、必ずしも大を取りて小を捨て、長を取りて短を捨つる事にあらず。

（正岡子規「叙事文」）

言葉を飾らず、誇張を加えず、見たまま模写しろ、写生しろと言っています。

つまり、ある出来事があったとして、それを別の言葉（元の像を再現しにくい言葉、観念的な言葉）に置き換えてしまふところに原因があるのだから、見たまま、感じたままを書いて、出来事をそのまま「保存」しろということです。

とは言え、見聞きしたこと、感じたことをすべて書いていたら、話がなかなか前に進みませんね。

そこで取捨選択です。なぜこの描写を書いたのか、なぜ必要なのか、あとの展開とどう関わるのか、そうしたことを考えたらうで捨てると、そういうわけです。

§2 描写の方法

【五感を働かせる】

道がつづら折りになって、いよいよ天城峠に近づいたと思う頃、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじい早さで麓から私を追って来た。

私は二十歳、高等学校の制帽をかぶり、紺飛白の着物に袴をはき、学生カバンを肩にかけていた。一人伊豆の旅に出てから四日目のことだった。

（川端康成『伊豆の踊子』）

目を使って描写していますから情景が視覚的ですし、「私を追って来た」のあたりには作者の筆使いを感じますね。

『仮面ライダー』のイントロが流れると、若い連中は一斉に笑った。ジョッキに残っていたビールを飲み干してソファアから立ち上がり、マイク片手にステージに向かう吉岡の背中に、「主任、がんばってえ！」と女子社員の声が飛ぶ。

（中略）とつづく歌は始まっているのに、吉岡は「とおーっ！」と一声吠えて、バンザイのポーズでジャンプした。高さ、約五センチ。体の動きにワンテンポ遅れてふわりと浮き上がったネクタイが、脂

ぎった鼻の頭に当たった。

（重松清『ゲンコツ』）

会社での飲み会のひとこまです。吉岡という主任が、ウケを狙って無理して頑張っている場面です。状況や雰囲気がよく伝わってきます。

「吉岡の背中に」も効いています。描写というか説明ですが、この一言で場の空間、位置関係が認識できます。

また、最後の6行は、一瞬の光景が静止画になって目に浮かびますね。

豊樹がそっくりかたところ、手をつかまれ室内に引きこまれた。背中であが閉まる音がする。部屋のなかの暗さは目を閉じていてもわかった。勢いよく布のこする高い音が背中越しに鳴って、つぎの瞬間豊樹は目隠しをされていた。肌をすべるなめらかな感触でシルクだとわかる。冷たい闇が頭に巻きついたようだった。

（石田衣良『1ポンドの悲しみ』）

目を閉じている状態から目隠しをされます。視覚がないので、聴覚と触覚で描写をしています。このように描写は主と

して五感を使って書いていきます。

【動きのある場面は文を短く】

富治の侵入に気づく様子もなく、文枝は、あられもない寝姿を、まったくの無防備で晒している。（中略）

明かりが点いている部屋での夜這いなどしたことがなかった。だからためらいが頭をもたげたのだと考え、口ウソくを消しに動こうとした。

その時、ふいに文枝の顔が開き、富治の顔をまともに見あげた。

体が硬直した。動くに動けず、相手の口を塞ぐこともできない。

文枝の口から悲鳴が迸る。そう思っ

て逃げ出そうとした。

が、予想に反して、彼女の口から悲鳴があがることがなかった。

「誰？」とひとこと言ったあとで「あつ」と小さく漏らし、「アメ流しの時の——」と呟いた。

（熊谷達也『邂逅の森』）

文枝が目を開くまでは比較的ゆっくりと描写していますが、文枝に気づかれたあとはセンテンスが短くなり、改行も多くなっています。

場面に動きがないときはじっくり書いていますが、動きのあるシーンでは描写や解説は最小限にとどめています。

【人物の主観で書く】

人いきれとヤニ臭い煙の中で、男の片頬にはつきりと笑みが浮かんだ。相手を値踏みしたうえで、見下しきつた薄笑いだ。目は口ほどにものを言う。何か用かよ。俺に意見しようなんて度胸がいいじゃないか。半笑いの口元から心の声が聞こえた。

（真保裕一『繋がれた明日』）

一元視点の場合は特にそうですが、小説に書くことは、基本的には視点人物の心に映ったものになります。つまり、主観です（ちなみに視点人物とは、カメラの役割を担ってシーンを写している登場人物のことです）。

一人の視点で書く利点は、そのほうがカメラが固定されてシーンが安定するからですが、一人の人物の主観で書いたほうが意味を引き出しやすいということもあります。

たとえば、十人で討論会をやれば偏った結論は出ないと思いますが、聞いているほうは混乱したりします。一方、ただ一人が演説をした場合、独善的にはなるかもしれませんが、話は理解しやすいはずです。

小説の場合も同じです。一人の人物の世界だからこそ、私たちはそれが理解できるところはあります。

§3

描写の効果

【話に幅を持たせる】

「ねえ、見てみて。どの子もすごくかわいいよ」

引越し会社の段ボールのなかに古い毛布が敷いてあった。母猫は横になり、用心深そうに交互に秀美と朝世を見あげた。細く締まった筋肉質の猫だが、腹の皮だけがすこしたるんでいた。明るい栗色の毛並みは密で美しく、グリーン目の目は黒い瞳が縦長に浮かんでいる。

「お母さんもりりしいね。どれもかわいくて迷うなあ」

三匹の子猫はてのひらにのるほどいさかった。二匹は元気にじゃれあっていたが、残りの一匹はスフィックスのように澄まして、やんちゃな兄弟を見つめていた。その一匹だけ毛の色は青みがかったシルバーで、落ち着いた賢そうな表情をしている。俊樹がやってきて中腰で段ボールをのぞきこんだ。

「おー、ちびはみんな元気だな。そここの端っこの銀色だけ、格好つけてるな」

（石田衣良「ふたりの名前」）

三つのセリフの間に、やや長め的情景描写が挿入されています。

こうした描写を削り、話をさくさく進めることで読み手を心地よくさせる場合もあります。そんな書き方をしてばかりいると、筋しかない、なんの情感も醸さない話で終わる危険があります。

描写は話が前に進むのを阻む要素ですから、多すぎれば話は停滞しますが、逆に言えば、描写は話が進み過ぎるのを抑えてくれますし、話に膨らみを持たせてくれます。

唐突に切りだした話だった。夕食後、「宿題があるんじゃないの？」と母親の和美に小言を言われながらリビングに居残ってテレビを観ていた加奈子は、ドラマがコマーシャルに切り替わるのと同時にセツちゃんの話を始めたのだ。

「ソッコーだよ、速攻で嫌われちゃったの、みんなから」

「なんで？」と和美が訊くと、加奈子は「さあ……」と首をかしげ、口の中のクッキーを紅茶で喉に流し込んで、「よくわかんないけど」と付け加えた。

（中略）

コマーシャルが終わり、テレビの画面はドラマに戻る。和美はまだなにか言いたそうだったが、加奈子は通せんぼをする

るような手振りで話を打ち切った。

キムタクだったかソリマチだったか、雄介には格好つけて斜にかまえただけの男にしか見えないが、とにかく学校でいちばん人気のある俳優が主演するドラマで、これを観ていないと友だちとのおしゃべりに入っていけないのだという。

（重松清「セツちゃん」）

クッキーを食べながら紅茶を飲み、人気タレント主演のドラマを見ているという背景は、この小説をあらすじ化するようなときには真つ先に削られる部分でしょう。話の主旋律ではありません。

しかし、要らないかというところ、そんなことはありません。映画にしろ絵画にしろ、背景がしつかり描かれていないと情景が生けないということがありますが、小説も同じで、リアルに場面を浮き立たせるためには、背景の描写も重要です。ただ、背景にウェイトをかけてしまうとメインのシーンが沈んでしまうので、その点には注意してください。

【イメージやテーマの隠喩】

じゃこじゃこのビスケット、は母の考えた言いまわしで、削ったココナッツだの砕いたアーモンドだの、干した果物のかけらだの入ったビスケットのことだ。舌触りが悪く、混乱した味がするので、

我家の人間はみんな嫌っていた。

（江國香織「じゃこじゃこのビスケット」）

じゃこじゃこのビスケットは、若いこととは愉快なことではなかったという十七歳の主人公の気持ちを象徴したもので、作品のタイトルにもなっています。

その意味では同作に不可欠の要素ではありますが、ストーリー展開という観点で見ると、じゃこじゃこのビスケットがなくても話は成り立ちます。

つまり、ストーリーのための描写ではなく、主人公の気分やテーマを表すための描写ということでしょう。

刑務所を出たHが最初に思ったのは、信号機のランプが見慣れないものに変わっているということだった。

信号の粒子が、粗い。粗くてつぶつぶしている。バスが次の信号で停車すると、それは十年前にみたのと同じランプで、どこか古ぼけてみえる。

さっきのあの信号機の光こそが「二十一世紀」だ。なんとなくそう思った。

（長嶋有「青色LED」）

この導入部も、なくてもストーリーは成り立ちます。つまり、「LED」はストーリー展開の要から出てきた小道具ではなく、刑務所にいた空白の十年を象徴させた小道具と言えます。

「再生」と「停止」ボタン

そのとき、ステージわきに立っている女性が片手で耳のイヤホンを押さえた。口元につぎでたマイクにむかつてなにか返事をしてうなずく。黒いタイトスカートのスーツをびしりと着た小柄な女性だった。髪は底光りするような輝きでうしろに束ねられている。年齢は二十代なかばだろうか。彼女は軽い身のこなしでテーブルを縫ってやってきた。

（石田衣良「誰かのウエディング」）

中盤の「黒いタイトスカートのスーツをびしりと着た小柄な女性だった。髪は底光りするような輝きでうしろに束ねられている。年齢は二十代なかばだろうか」のあたりでは時間が止まっている感じがしますね。

一方、この前後は「イヤホンを押さえた↓うなずく↓やってきた」というふうに人物が動いていますから、時間も動いているように感じます。しかも、現実と同じような速さで動いています。

このように描写中は時間が止まっているか、または、現実と同じように一秒ずつ時間が進み、後戻りしたり、急に進ん

だりはしません。

バーをでると、翌朝のんびりできるので、ラブホテルより自分の部屋のほうがいいと、彼女ははつきりいった。（中略）彼女とのセックスはいつもの平均的なセックスだった。期待しているあいだのほうが楽しいという、ゆきずりの場合によくあるパターンだ。

明け方、慶司は女のいびきで目が覚めた。

（石田衣良「スローガール」）

こちらは、作中の現在を書く描写の手法ではなく、あらすじ的に出来事をなぞっています。説明的です。

この書き方の場合、「明け方」と書けば「明日」になりますし、「十年が過ぎた」と書けば一瞬で十年が経ちます。

「動から静へ、静から動へ」

陸軍から払い下げてもらった軍服のスポンを捲りあげて沢に入り、小さな淵のところで、痺れから醒めかけた大物のサクラマスを手を伸ばした時のことだ。

同じマスに手を伸ばした別の誰かと、

額どうしがぶつかった。

「痛っ」と言って顔をあげたすぐそばに、おでこをさすっている若い娘の顔があった。

見た瞬間、アメの毒が回ってしまったみたいに体が痺れた。

しばらく言葉が出てこなかった。

息が詰まるほどに器量のよい娘に、富治には見えた。しもぶくれの耳から額にかけての色白の頬が、思わず指でつねるか、ぱくりと噛んでしまいたくなるほど、ふつくと可愛らしかった。それ以上、何がどうと説明するのは難しい。文字通りの一目惚れというしかなかった。

（熊谷達也『邂逅の森』）

引用文では、前半は主人公の動作をとらえつつ、物語を動かしています。

ビデオと言えば「再生ボタン」が押され、現実と同じ速さで出来事が再現される感じですね。

ところが、後半では一転、作者は時間を止め、娘の特徴の中から「色白の頬」一点を取り上げ、娘を描写しながら主人公の一目惚れぶりを描いています。ビデオは「一時停止」になっています。

奈穂美はペットボトルに直接口をつけて飲んでいく。（中略）あらわになった喉の筋がゆつくりと動く。肌の白さは喉からブラウスの襟元にまでつつき、肩の

線が始まるかどうかのときの曲線が、

こんなふうに思いたくはないが、なまめかしい。ブラジャーのレース模様が透ける。ブラウスの襟ボタンを留めてほしい。

もう朝夕は息が白くなるのだから、ブレザーの下にベストかセーターを着て、胸を隠してほしい。（中略）

「あのさあ」

ペットボトルをテーブルに戻して、奈穂美が言った。孝夫をまつすぐに、強いまなざしで見据えていた。

「言いたいことがあるんだったら、言ってくんない？」

（重松清「パンドラ」）

前半部分は、思春期の娘をもった父親の心情が書かれているだけで、物語は動いていません。時間の感覚もあります。しかし、ビデオの画面がストップモーションになっているからこそ、読み手は筋に追われることなく、落ちついて、しみじみと感慨にふけることができます。

で、「あのさあ」というセリフで一転、エンジンがかかります。誰かが「再生」ボタンを押して、「一時停止」になっていた画面を動かしたかのようです。

ということ、ストーリーが同じでも、描写いかんで秀作にもなれば駄作にもなります。描写はそれぐらい重要です。

皆さんも実際に書きながら、読みながら、日々研究してみてください。